

米国の1910年代における 唱歌教授書および歌曲集の構成と教授法について (1)

— *The Progressive Music Series Teacher's Manual* における楽曲の分析を中心として —

川口 さやか

(本講座大学院博士課程後期在学)

はじめに

米国公教育における歌唱教授は、Mason, L. の働きかけによって、ボストン市の公立学校での唱歌科設立 (1838) から始まった。その後、19世紀最後の四半世紀は、読譜の教授が中心となったが、読譜を重視しすぎたことへの反省から、歌そのものの教授が見直されるようになった。しかし、教育実践においては、従来の保守的な思想にもとづく伝統的な教授を行う教師が依然多く、新教育思想にもとづく児童中心主義的教育を行う教師は、実験校などを中心に、ごく一部であった¹⁾。

荒巻 (2001) は、19世紀から20世紀にかけて、音楽科開設を求める運動があり、音楽科教育の開拓的な研究と実践が行われ、1917年に中等学校において、1921年に初等学校において音楽科が設立されたことを明らかにした。また Tellstrom (1971) は、1910年に中等学校を始まりとして鑑賞教育が行われた、と述べている。Gehrkens (1919) は、1910年代当時の音楽科教育が、暗誦、視唱、音楽理論、音楽史、多くの優れた音楽の聴取といった、さまざまな内容を教授するようになり、知的側面と情意的側面の育成の統合を目指した、と述べている。これらのことから1910年代は、音楽科教育の領域の拡大が生じ、唱歌科から音楽科へ移行した重要な時期であると考えられる。

Gehrkens (1924) は、1900年代初頭における教授書と歌曲集の変遷について、*Modern Music Series*、*Melodic Music Readers*、*The Eleanor Smith Music Course*、および *The Progressive Music Series* を取り上げている。また、*The Progressive Music Series* は、まったく新しい教授方法であると評価しており、その後に出版される教授書に影響を及ぼした、と述べている。そして荒巻 (2001) では、この教授書が初めて鑑賞教育の重要性を説いたことが明らかにされている。さらに、*The Progressive Music Series* の理念、全体の構成、および各学年の学習領域などについて詳細に検討がなされている。しかし、楽曲の分析や1910年代の他の教授書および歌曲集との比較検討は行われていない。したがって本稿では、*The Progressive Music Series* (1915-1916) で用いられている楽曲の (1) 歌詞内容、(2) 調、(3) 拍子、(4) 音域、(5) 最高音について分析を行い、さらにそれらと教授法に関する記述とを総合して検討を行うことによって、*The Progressive Music Series* に見られる教授法の特徴を明らかにする。そして次稿では、*The Progressive Music Series* と1910年代の他の教授書および歌曲集との比較検討を行いたい。

I. *The Progressive Music Series Teacher's Manual Volume I, II, III* (1915-1916) の構成

*The Progressive Music Series*²⁾ は、児童・生徒用の教科書と、教師用指導書の2種類からなる。児童・生徒用の教科書は、*Book I* から *Book III* までの全3巻で構成されている。教師用指導書は、*Teacher's Manual Volume I* から *Volume III* までの全3巻で構成されている。*Teacher's Manual Volume I* から *Volume III* は *Book I* から *Book III* にそれぞれ対応している。*I* が第1学年、第2学年、第3学年、*II* が第4学年と第5学年、*III* が第6学年、第7学年、第8学年を対象としている。*Teacher's Manual* は、児童・生徒に体系的に教授できるように、暗誦、視唱、音楽理論などの教授方法、および学年別の詳細な教授内容と教授方法などを示している。以下、*The Progressive Music Series Teacher's Manual Volume I* を *The Progressive I*、*The Progressive Music Series Teacher's Manual Volume II* を *The Progressive II*、*The Progressive Music Series*

*Teacher's Manual Volume III*を*The Progressive III*、とする。本稿では、教師用指導書である*The Progressive Music Series Teacher's Manual*における楽曲の分析を行う。

*Teacher's Manual*は、約1/3が教授内容と教授方法に関して記述されており、約2/3が児童・生徒用の教科書の伴奏が記載されている。*Teacher's Manual*の目次は以下のような構成からなる。序章では、いずれの教授書（以下、教師用指導書を教授書と記す。）においても教育理念と、Hall, G. S.らの心理学にもとづく子どもたちの発達段階と教授方法について述べられている。そして第1章では、初級段階（*The Progressive I*）、中級段階（*The Progressive II*および*The Progressive III*）の教育の概要が述べられている。第2章では、学年別の概要が述べられている。その後*The Progressive I*では、第3章はフォークダンスと歌あそびの歌、第4章は補足の暗誦歌、第5章は*Book I*の伴奏が記載されている。*The Progressive II*および*The Progressive III*では、第3章は教授内容ごとの概要、第4章は*Book II*と*Book III*および伴奏が記載されている。

II *The Progressive Music Series Teacher's Manual Volume I、II、III* (1915-1916) における楽曲の内容

II-1 楽曲の歌詞内容、調、拍子、音域、最高音の分析

以下に(1)歌詞内容、(2)調、(3)拍子、(4)音域、(5)最高音の項目別に分析を行う。分析を行った楽曲の曲数は、*The Progressive I*では184曲、*The Progressive II*では165曲、*The Progressive III*では143曲³⁾、である。

(1) 歌詞内容

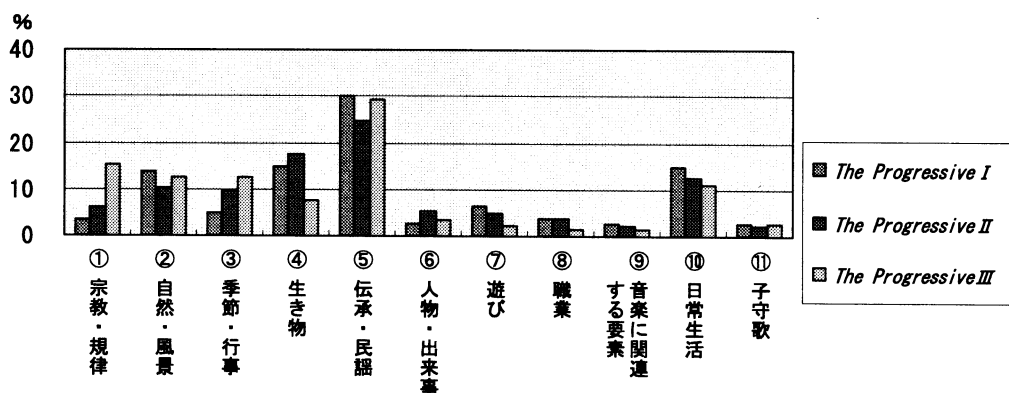


図1 歌詞内容の分析

歌詞内容については、その内容から、①宗教・規律、②自然・風景、③季節・行事、④生き物、⑤伝承・民謡、⑥人物・出来事、⑦遊び、⑧職業⁴⁾、⑨音楽に関連する要素⁵⁾、⑩日常生活、⑪子守歌に分類した⁶⁾。フォークダンスの14曲は歌詞が付されていないために、歌詞内容の分析から除外した。上記の分類ごとの比率を図1に示す。

*The Progressive I*では、⑤伝承・民謡が29.89%（55曲）、④生き物および⑩日常生活が14.67%（27曲）、の順で比率が高い。*The Progressive II*では、⑤伝承・民謡が24.85%（41曲）、④生き物が17.58%（29曲）、の順で比率が高い。*The Progressive III*では、⑤伝承・民謡が29.37%（42曲）、①宗教・規律が15.38%（22曲）、の順で比率が高い。これらのことから、いずれの教授書も、⑤伝承・民謡曲の比率が最も高いことが分かる。このことから、*The Progressive Music Series*は、古くから伝わる楽曲や、生活感情や地域性を反映して長く歌い継がれた楽曲が重視されていると考えられる。

*The Progressive I*では、⑩日常生活、②自然・風景、⑦遊びの比率は*The Progressive II*および*The Progressive III*に比べて高く、下学年では、より子どもの身近にある事象を題材にした楽曲が重視されていると考えられる。また、①宗教・規律の比率は*The Progressive III*では非常に高く、高学年になるにつれて宗教に対する意識や社会生活における規律に関連した内容が重視されていると考えられる。一方で⑩日常生活の比率は、いずれの教授書も約1割見られ、学年が上がってもあまり変化していない。このことは*The Progressive Music Series*では、日常生活に関する内容を学年問わず重要な教授内容ととらえていると考えられる。以上のことから、子どもたちの精神的な発達段階への配慮がうかがえる。

(2) 調

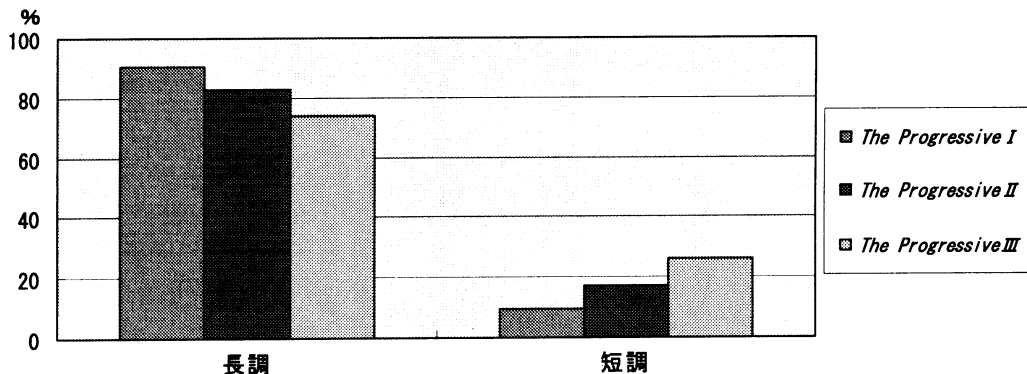


図2-1 長調と短調の分析⁷⁾

調についてはまず、教授書別の長調と短調の比率を、図2-1に示す。*The Progressive I*では、長調が90.76% (167曲)、短調が9.24% (17曲)、*The Progressive II*では、長調が83.03% (137曲)、短調が16.97% (28曲)、*The Progressive III*では、長調が74.13% (106曲)、短調が25.87% (37曲)、であった。このことから、長調の比率が高いことが分かる。しかし長調の比率は学年が上がるにつれてしだいに低くなり、短調の比率は学年が上がるにつれてしだいに高くなっている。*Progressive III*では、全体の約1/4を短調が占めている。

次に、長調と短調別の調ごとの比率を示す⁸⁾。図2-2に長調の分析、図2-3に短調の分析を示す。

長調については、*The Progressive I*では、ト長調が26.09% (48曲)、ヘ長調が13.04% (24曲)、の順で比率が高い。*The Progressive II*では、ト長調が18.79% (31曲)、ヘ長調が15.76% (26曲)、の順で比率が高い。*The Progressive III*では、ト長調が18.18% (26曲)、ニ長調が11.19% (16曲)、の順で比率が高い。これらのことから、いずれの教授書も、ト長調の比率が高いことがわかる。この理由を明らかにするために、さらにト長調の楽曲の開始音高の分析を行った。ト長調の楽曲の開始音高ごとの比率を図3に示す。

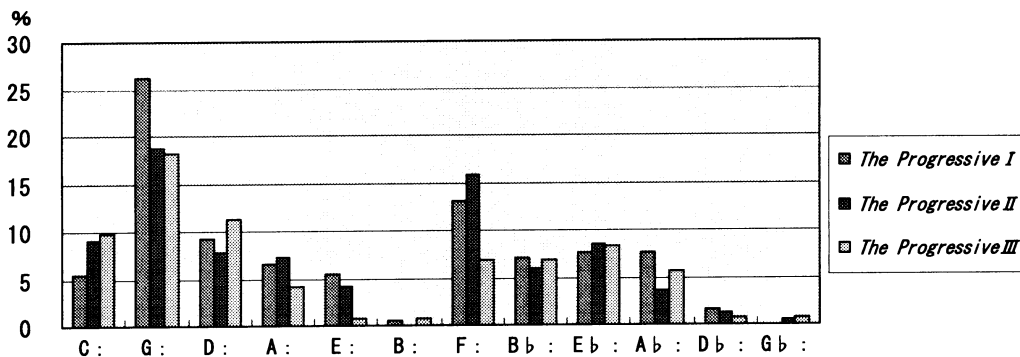


図2-2 長調の分析⁷⁾

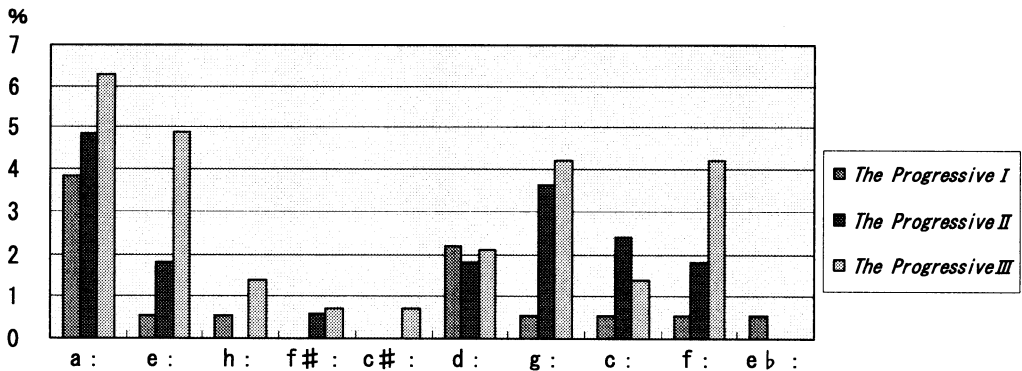


図 2-3 短調の分析⁷⁾

次に、短調について述べる。短調は長調と比較するとその比率は低いですが、図 2-3 を見ると、調の種類が多いことが分かる。また、*The Progressive I* では、イ短調およびニ短調の他は、低い比率でしかみられなかった調が、*The Progressive II* では、調号に b を 2 つから 4 つ有する調の比率が高いことが分かる。加えて調号のないイ短調の比率も高いことが分かる。また、*The Progressive III* では、さらに短調の楽曲の比率は高くなっている。このことは、下学年では楽曲そのものに興味や関心をいだいていたものが、学年が上がるにつれて、楽曲をさらに深く味わう、楽曲から自らの考えを膨らませるといった、感情の変化が著しくなることに配慮していると考えられる。したがってここに子どもたちの精神的な発達段階への配慮がうかがえる。

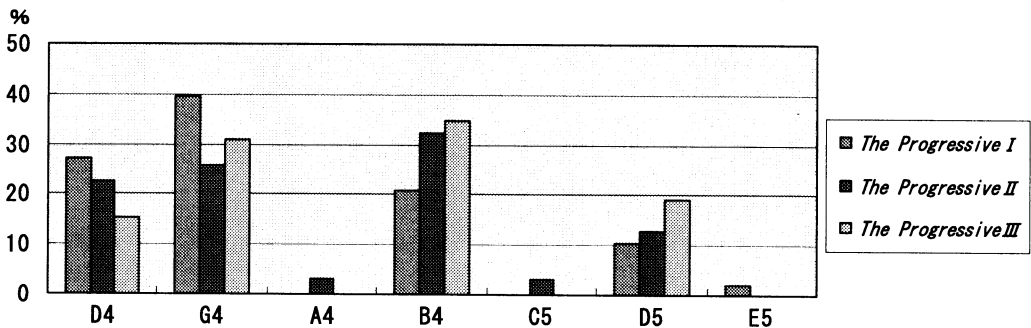


図 3 ト長調の楽曲の開始音高の分析

ト長調の楽曲の開始音高ごとの比率については、下学年では、D4 が 27.08% (13 曲) と、全体の約 1/4 を占めており、*The Progressive II*、*The Progressive III* と、学年が上がるにつれて低くなっている。一方、B4、D5 は、*The Progressive II*、*The Progressive III* と、学年が上がるにつれて高くなっている。これらのことから、下学年ではまず、普段の話し声に近い音高⁹⁾ から始まる楽曲が用いられており、学年が上がるにつれて、高い音高で始まる楽曲に移行している、と言える。このことは、話をする際の声質と、歌を歌う際の声質の違いを感じ取ることを重視していると考えられる。また、子どもの声区については、一般に A4 から B4 に換声点がある、と言われて¹⁰⁾。したがってト長調の上中音である B4、属音である D5 から歌い始めると、子どもたちが頭声発声を用いて歌い始める可能性が高いと考えられる。

以上のことから、ト長調の楽曲は、主要な機能を果たしている上中音や属音などの音高と、話し声や換声点といった、発声の際に重要となる音高が一致し、なおかつ調号に # を多く有していない調であり用いやすいために、ト長調の楽曲の比率が高いと考えられる。ト長調の楽曲については、II-2 でさらに詳細に分析を行う。

(3) 拍子

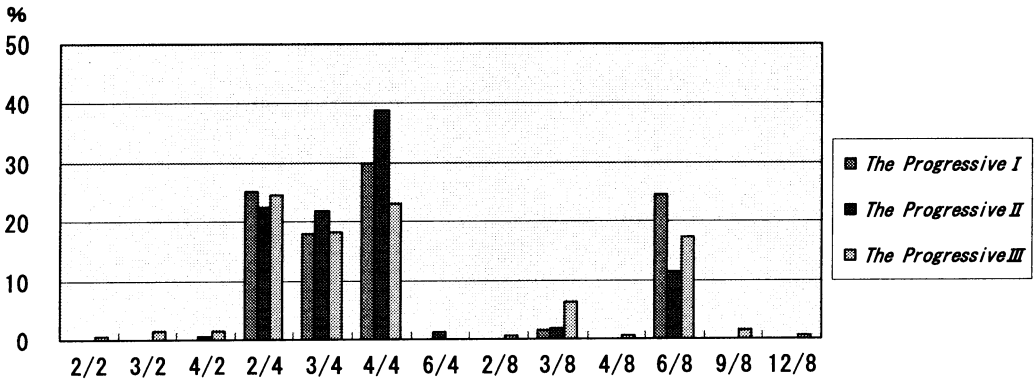


図4 拍子の分析¹¹⁾

次に、拍子ごとの比率を図4に示す。いずれの教授書も、2/4拍子、3/4拍子、4/4拍子、6/8拍子、の比率が高いことが分かる。

また、分析対象からは除外したが、楽曲の途中で拍子が変わる曲数は、*The Progressive I*では1曲、*The Progressive II*では3曲、*The Progressive III*では5曲である。このことから、楽曲途中で拍子が変わる曲数は、学年が上がるごとに増加している。これらの楽曲を見ると、拍子が変わる箇所、調が変わる、繰り返し記号を伴う、といったその他の要素の変化を伴う複雑な構造をもつものが見られた。したがって、このような複雑な楽曲に関して、子どもたちの精神的発達段階に応じた配慮がなされていることがうかがえる。

そして、*The Progressive I*における、課外で用いるフォークダンスの14曲、歌遊びの3曲のなかで、2/4拍子の楽曲は12曲にのぼる。これらの楽曲は、身体の動きを伴いながら、2/4拍子により親しんでいくことが考えられる。このことは、*The Progressive I*において、2/4拍子の比率が4/4拍子に次いで高く、約1/4を占めていることと関係していると考えられ、ここにも子どもたちの精神的発達段階への配慮がうかがえる。

(4) 音域

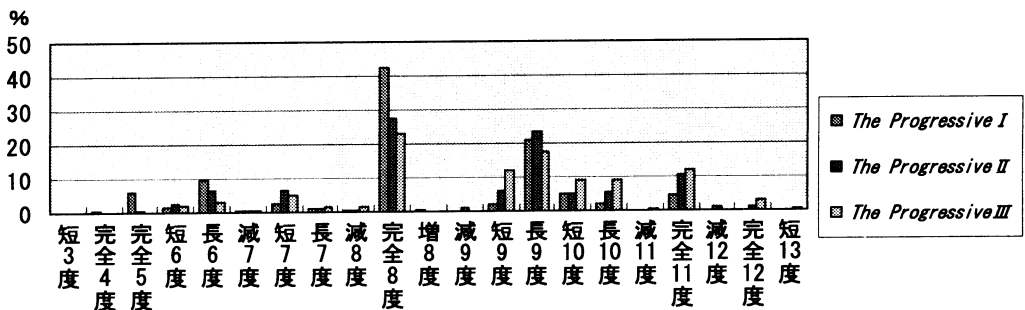


図5 音域の分析

次に、音域ごとの比率を図5に示す。*The Progressive I*では、完全8度が42.93% (79曲)、長9度が20.65% (38曲)、の順で比率が高い。*The Progressive II*では、完全8度が27.27% (45曲)、長9度が23.64% (39曲)、の順で比率が高い。*The Progressive III*では、完全8度が23.08% (33曲)、長9度が17.48% (25曲)、の順で比率が高い。これらのことから、いずれの教授書も、完全8度の比率が高いことが分かる。また完全8度を越える音域の比率(増8度以上)は、*The Progressive I*では34.78%、*The*

Progressive II では 53.93%、*The Progressive III* では 63.64%、である。以上のことから考えると、完全 8 度の音域を有する楽曲は、下学年から比率が高い一方で、完全 8 度を越える音域の楽曲の比率は、学年が上がるにつれて、次第に高くなっていることが分かる。また、最も音域が狭い楽曲は、*The Progressive I* では完全 4 度、*The Progressive II* では完全 5 度、*The Progressive III* では短 6 度である。次に音域が狭いものは、*The Progressive I* では完全 5 度、*The Progressive II* では短 6 度、*The Progressive III* では長 6 度、である。このように、学年が上がるにつれて、少しずつ音域が広がっていることが分かる。

そして、長 6 度は、*The Progressive I*、*The Progressive II*、*The Progressive III*、と学年が上がるにつれて、比率が次第に低くなっている。さらに、長 9 度は、*The Progressive I* から *The Progressive II* では比率が高くなり、*The Progressive III* では低くなっている。また、長 9 度の比率が低くなっているのに対して、短 9 度、短 10 度、長 10 度、完全 11 度の比率が高くなっている。以上のことから、次第に音域を高音域に広げていることが考えられ、子どもたちの声帯などの身体的発達段階に配慮していることがうかがえる。

(5) 最高音

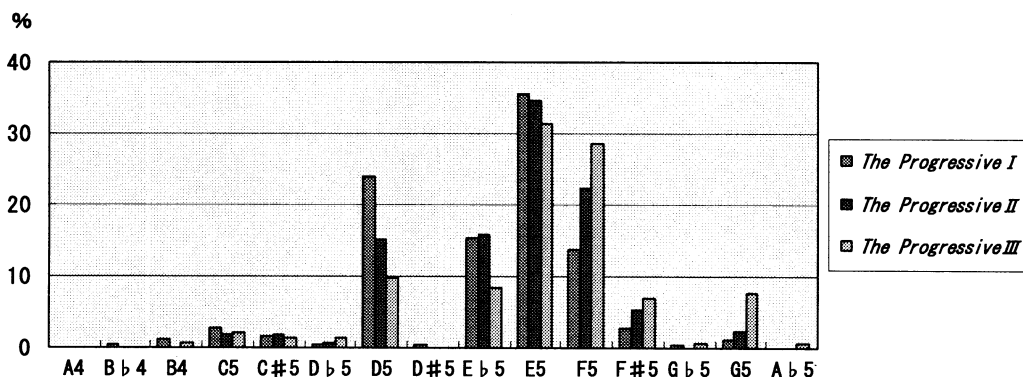


図6 最高音の分析

次に、最高音ごとの比率を、図6に示す。*The Progressive I* では、最高音がE5である楽曲が35.33% (65曲)、D5である楽曲が23.91% (44曲)、の順で比率が高い。*The Progressive II* では、最高音がE5である楽曲が34.55% (57曲)、F5である楽曲が22.42% (37曲)、の順で比率が高い。*The Progressive III* では、最高音がE5の楽曲が31.47% (45曲)、F5の楽曲が28.67% (41曲)、の順で比率が高い。これらのことから、学年が上がるにつれて、最高音が上昇していることが分かる。また、最高音の平均値は、*The Progressive I* では、E♭5 + 33.15セント、*The Progressive II* では、E♭5 + 78.79セント、*The Progressive III* では、E5 + 12.59セント、であった。このように教授書間で大きな差異が見られる。

そして、最高音の範囲は*The Progressive I* ではB♭4 - G5であり、*The Progressive II* ではC5 - G5であり、*The Progressive III* ではB4 - A♭5であった。このように、学年が上がるにつれてしだいに高い音高の最高音を有する楽曲の比率が高くなっている。以上のことから、子どもたちの身体的発達段階への配慮がうかがえる。

II-2 ト長調の楽曲の最高音、最低音、音域の分析

II-1の結果から、*The Progressive Music Series Teacher's Manual*における楽曲の調の比率は、ト長調の比率が最も高い。用いられている音域の比率は完全8度の比率が高いことから、最高音はG5が最も多いことが予測されるが、実際にはG5の比率は低い。ここに矛盾が生じており、その理由を明らかにするために、さらにト長調のみについての楽曲の最高音、最低音、音域の分析を行った。ト長調の楽曲の最高音の比率を図7に、ト長調の楽曲の最低音の比率を図8に、ト長調の楽曲の音域の比率を図9に、それぞれ示す。

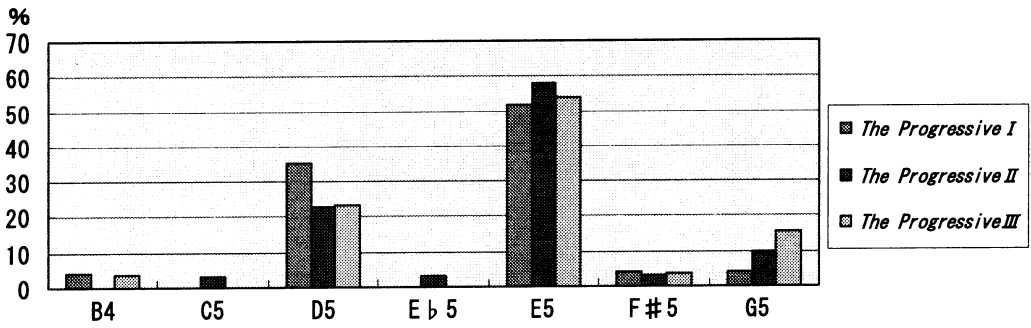


図7 ト長調の楽曲の最高音の分析

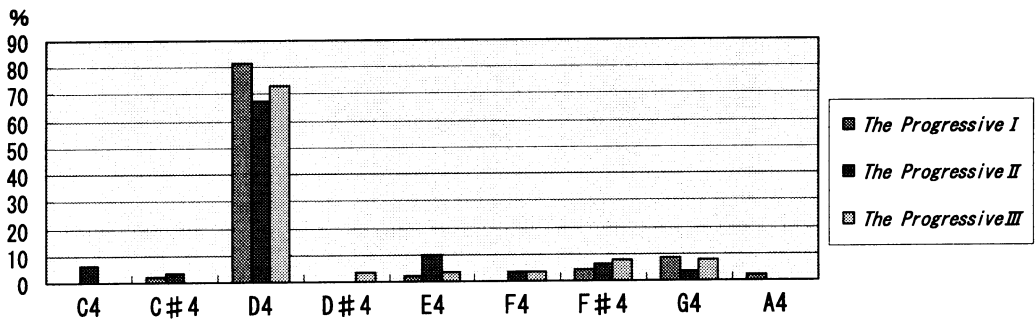


図8 ト長調の楽曲の最低音の分析

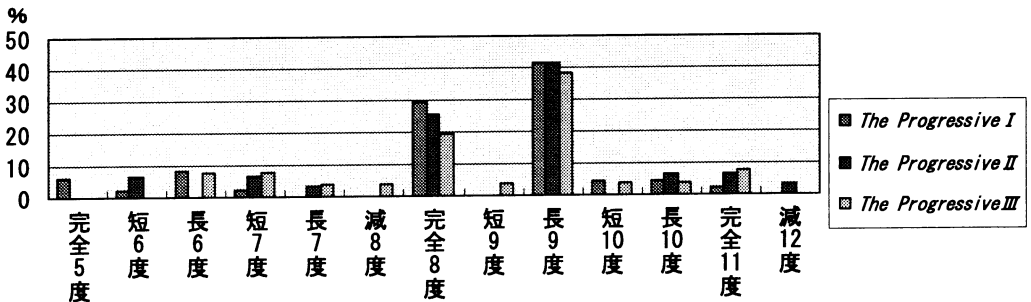


図9 ト長調の楽曲の音域の分析

最高音の比率は、E5がいずれの教授書においても高く、*The Progressive I*が52.08% (25曲)、*The Progressive II*が58.06% (18曲)、*The Progressive III*が53.85% (14曲)であり、いずれの教授書においても50%以上の比率を占めている。一方G5は、*The Progressive I*が4.17% (2曲)、*The Progressive II*が9.68% (3曲)、*The Progressive III*が15.38% (4曲)であり、いずれの教授書においても比率が低いことが分かる。最低音の比率は、D4がいずれの教授書においても高く、*The Progressive I*が81.25% (39曲)、*Progressive II*が67.74% (21曲)、*Progressive III*が73.08% (19曲)、である。一方G4は、*The Progressive I*が8.33% (4曲)、*The Progressive II*が3.23% (1曲)、*The Progressive III*が7.69% (2曲)であり、いずれの教授書においても比率が低いことが分かる。音域は、長9度は、*The Progressive I*が41.67% (20曲)、*The Progressive II*が41.74% (13曲)、*The Progressive III*が38.46% (10曲)であり、完全8度は、*The Progressive I*が29.17% (14曲)、*The Progressive II*が25.81% (8曲)、*The Progressive III*が19.23% (5曲)であり、いずれの教授書でも比率が高い。以上のことから、ト長調の楽曲における最高音は、G5を

多く用いるのではなく E5 程度までの音域に抑えていることが分かる。一方で最低音は、G4 以上の音域に抑えるのではなく、D4 程度の低い音域の音まで用いていたことが分かる。また、最高音の D5 の比率は、いずれの教授書においても 20% 以上を占めており、E5 に次いで比率が高い。これらの結果から、完全 8 度と長 9 度の比率が高いと考えられる。

Ⅲ *The Progressive Music Series Teacher's Manual Volume I、II、III* (1915-1916) の楽曲の分析からみられる特徴

以上のように、*The Progressive Music Series Teacher's Manual* で用いられている楽曲を分析した結果、(1) 精神的発達段階への配慮、(2) 身体的発達段階への配慮、(3) 声質への配慮、の 3 点の特徴が明らかになった。以下に楽曲の分析から明らかになった特徴と、教授法に関する記述とを総合して検討を行う。

Ⅲ-1 精神的発達段階への配慮

精神的発達段階への配慮は、拍子、調、歌詞内容に特に顕著に見られた。この精神的発達段階への配慮は、*Teacher's Manual* に取り入れられている Hall, G. S. らの心理学にもとづく考え¹²⁾に関連していると考えられる。その考えによって、児童・生徒の発達を、感覚期、連合期、青年期の 3 期に分類し、この 3 期を *Teacher's Manual Volume I、II、III* および児童・生徒用の *Book I、II、III* にそれぞれ対応させている。*Teacher's Manual* では、感覚期は、活動した結果よりも活動そのものに関心をもつ時期、連合期は、比較的ゆるやかな身体の成長がみられる時期、青年期は、精神的な変化が著しい時期である、と述べている¹³⁾。

The Progressive I においては、フォークダンスの 14 曲、歌遊びの 3 曲が含まれていた。*Teacher's Manual* では、感覚期は、模倣遊びや熱心な観察などが子どもの生活の中で多くを占める¹⁴⁾、と述べている。この考えによって、*The Progressive I* では、課外で用いるフォークダンスの曲と歌遊びの曲が多いと考えられる。また、これらの楽曲は、身体の動きを伴いながら、2/4 拍子により親しんでいることが考えられた。したがってこのことは、正規の授業でも 2/4 拍子の楽曲の比率が比較的高いことに影響を及ぼしていると考えられる。

そして、調の分析では、*The Progressive II* では、調号に b を 2 つから 4 つ有する短調の比率が高いことに加え、調号を有しないイ短調の比率も高いことを明らかにした。このことは下学年で学んだ、調号に b や # を多く有しない調を学ぶとともに、さらに調号に b を 2 つから 4 つ有する調を学ぶことによって、以前学んだことをもとに複雑な構造の調を学んでいることが考えられる。*Teacher's Manual* では、連合期は、忍耐強さが見られ、記憶力も増すことが特徴であり、経験をとおして事象の分類や再統合を行う時期である¹⁵⁾と述べられている。この考えが、*The Progressive II* の調号に b を 2 つから 4 つ有する短調の比率が高いことに加えて、調号を有しないイ短調の比率が高いことに影響を及ぼしていると考えられる。また、短調の比率は学年が上がるにつれて次第に高くなることは、子どもたちが楽曲をさらに深く味わう、楽曲から自らの考えを膨らませるといった、感情の変化が著しくなることに配慮していると考えられた。このことは、*Teacher's Manual* では青年期は精神的な変化が著しい時期、とする考えが影響を及ぼしていると考えられる。

歌詞内容の分析では、①宗教・規律の比率は *The Progressive III* では非常に高いことから、高学年になるにつれて宗教に対する意識や社会生活における規律に関する内容が重視されていると考えられた。前述したように、青年期は、精神的な変化が著しい時期であり、社会性、道徳性を養う時期、宗教の信念に影響を及ぼす時期、と述べられている¹⁶⁾。この考えが、*The Progressive III* では、①宗教・規律の比率が高いことに影響を及ぼしていると考えられる。

また、いずれの教授書においても、⑤伝承・民謡曲の比率が最も高く、⑩日常生活の比率は、いずれの教授書でも約 1 割見られた。民謡は、労働歌、祝い歌など、人々の生活に密接な関わりをもつ。したがって、⑤伝承・民謡曲と⑩日常生活は、学年を問わず重要な教授内容であるために、いずれの教授書でも重視されていると考えられる。*Teacher's Manual* では、感覚期は前述したように、模倣遊びや熱心な観察などが生活の中で多くを占める、と述べられている。連合期は前述したように、忍耐強さが見られ、記憶力も増すことが特徴であり、経験をとおして事象の分類や再統合を行うことが述べられている。青年期の教

授は、過去の作曲家の優れた作品にふれることなどをおして、作曲家の生涯と音楽史に関する視野を広げると述べられている¹⁷⁾。このことは、児童・生徒が自らの生活を考えることや、学校外での音楽活動を行うことにも影響を及ぼすと考えられる。以上のことから、感覚期、連合期、青年期のいずれの発達段階においても、経験をおして学ぶことが重視され、児童・生徒の日常生活と密接に関わっていることが分かる。この考えは、⑤伝承・民謡曲と⑩日常生活の比率が高いことに影響を及ぼしていると考えられる。

Ⅲ－２ 身体的発達段階への配慮

身体的発達段階への配慮は、音域と最高音に特に顕著にみられた。音域の分析では、以下3点を明らかにした。第1は、最も音域の狭い楽曲の音域が、学年が上がるにつれて、少しずつ広がっていることである。第2は、短9度、短10度、長10度、完全11度の比率が*The Progressive III*で高くなっていることである。第3は、完全8度を超える音域を有する楽曲が学年が上がるにつれて、次第に用いられていることである。最高音の分析では、最高音の範囲は*The Progressive I*ではB♭4－G5、*The Progressive II*ではC5－G5、*The Progressive III*ではB4－A♭5、であり、少しずつ高音域に広がっていることを明らかにした。これらのことから、*The Progressive Music Series*は、子どもたちの発声器官の発達に考慮した楽曲の構成であると考えられる。

*The Progressive I*では、下学年の子どもの声に関する注意事項の中で、以下のように述べている。教師は、子どもたちが運動場などで発声器官を不適切に扱うことに対して、注意を払うべきであり、目や歯といった他の器官と同じように、発声器官も大切に扱うことを子どもたちに伝えるべきである¹⁸⁾。このことは、下学年の子どもたちが無理に発声し、声帯などの発声器官を傷つけることがないように配慮し、子どもたちが普段の生活の中でも発声器官の適切な使用を意識することを重視していると考えられる。

Ⅲ－３ 声質への配慮

声質への配慮は、音域と最高音に特に顕著にみられた。音域の分析では、下学年から完全8度の楽曲の比率が高いことを明らかにした。最高音の分析では、最高音の平均値が、*The Progressive I*では、E♭5 + 33.15セント、*The Progressive II*では、E♭5 + 78.79セント、*The Progressive III*では、E5 + 12.59セントであり、教授書間で大きな差異が見られたことを明らかにした。このことから、下学年から高音域の音高を有する楽曲を歌うことを重視していたと考えられる。ト長調の楽曲の開始音高の分析では、換声点付近より高い音高では、B4、D5の比率が高いことを明らかにした。このことから、子どもたちが頭声発声を用いて歌い始める可能性が高いと考えられる。以上のことから、*The Progressive Music Series*では、頭声発声を用いることを下学年から意図していたと考えられる。頭声発声を用いて歌うことは、声質に大きく影響を及ぼすと考えられる。

また、同じくト長調の楽曲の開始音高の分析では、*The Progressive I*ではD4やG4の比率が高いことを明らかにした。このことから下学年から話す際の声質と歌を歌う際の声質の違いを感じ取らせ、子どもたちが胸声から頭声へと適切に移行できることを重視していると考えられる。

また、*The Progressive I*では、子どもたちが歌う際の声質は荒い、甲高い声質ではなく、軽く、美しい声質であるべきである¹⁹⁾、と述べている。*The Progressive II*および*Progressive III*では、音質の項目において、望ましい子どもの声質は軽く、美しい声質である、と述べている²⁰⁾。さらに、滑らかな声の育成の項目では、頭声発声について述べている²¹⁾。これらのことから、*The Progressive Music Series*では、頭声発声を用いた美しい歌声を目指していると考えられる。

また、*The Progressive I*では、子どもたちに歌を歌わせる際の注意点として、高音域で音の高さを正しく保つためには、身体が自然な状態であることが重要である²²⁾、と述べている。このことは、頭声発声を用いて歌うための重要な事項の1つであると考えられる。

以上のことから、*The Progressive Music Series*では、子どもたちが頭声発声を用いた美しい歌声で歌を歌うことを目指して、教授を行っていたと考えられる。

おわりに

以上のように、米国の1910年代における唱歌教授書の構成と教授法についての検討を行うために、*The Progressive Music Series Teacher's Manual* で用いられている楽曲の分析を中心として行い、さらにそれらの結果と教授法に関する記述とを総合して検討を行うことによって、精神的発達段階への配慮、身体的発達段階への配慮、声質への配慮、の3点の特徴が明らかになった。精神的発達段階への配慮からは *The Progressive Music Series* が取り入れた心理学にもとづく考えが影響を及ぼしていることが考えられ、身体的発達段階と声質への配慮からは、頭声発声にもとづいた美しい声を用いて系統的に教授が行われることが考えられた。このことは、*The Progressive Music Series* は、唱歌科から音楽科への移行期に、鑑賞教育の重要性を説いた点で重要な意味をもつ教授書であるが、唱歌教授の観点からもさまざまな配慮がなされており、この点でも重要な意味をもつ教授書であるといえる。今後さらにさらに1910年代に見られる他の教授書および歌曲集の特徴や、1910年代の教授書および歌曲集に共通して見られる特徴を明らかにしたい。

注、および引用文献

- 1) Keen (1982) p. 224 を参照した。
- 2) 著者である Parker, H. は当時、エール大学、McConathy, O. はノースウェスタン大学、Miessner, W. O. はミルウォーキー州立師範大学に所属しており、Birge, E. B. はインディアナ州における公立学校の音楽指導者であった。
- 3) 荒巻 (2001) は、*The Progressive Music Series* において、鑑賞活動は第4学年から始められ、課外として位置づけられていたことを述べている。したがって、正規の授業では、唱歌を中心とした授業の中に鑑賞的要素を含んだ学習を行っていた、と考えられる。このことからすべての楽曲を分析対象とした。
- 4) 職業の項には、時計、鐘に関する楽曲も含めた。
- 5) 音楽に関連する要素は、階名、歌うこと、ダンス、楽器などに関する楽曲を指している。
- 6) 分類に際しては、唐澤富太郎『教科書の歴史』創文社、1956、p. 532-533、および Giddings, T. P., Earhart, W., Baldwin, R. L. & Newton, E. W., *Songs of Childhood*, Ginn and Company, 1923, p. 3、の2つの文献を参照した。
- 7) 調については、転調を伴うものも多数存在したが、主に機能している調を記している。アルファベットの大字が長調、小文字が短調を示している。グラフ中の X 軸は、左から調号に # や b を含まないもの、# を調号に含むもの、b を調号に含むもの、の順で示している。
- 8) 分析の対象とする楽曲を統一するために、(1) 歌詞内容で除外したフォークダンスの曲 (14 曲) は、(2) 調、(3) 拍子、(4) 音域、(5) 最高音、の分析でも除外した。
- 9) 例えば、水崎ら (2003) は、話し声の高さ (和声位) に関する先行研究の検討を行っている。それによれば、話し声の高さ (和声位) は C4 付近が多い、とする研究が多かった。
- 10) 例えば、Phillips (1996) は、思春期および思春期前の女子が、トレーニングされていない場合、胸声区 (chest register) と上声区 (upper register) の境は、A4 付近であると述べている。
- 11) 拍子については楽曲途中で変化するもの (*The Progressive I* 1 曲、*The Progressive II* 3 曲、*The Progressive III* 5 曲) は分析から除外した。
- 12) Parker, H., ed., *The Progressive Music Series Teacher's Manual Vol. I - III* Silver Burdett and Company, 1915-1916, pp. 3-7
- 13) 12) と同書、pp. 3-7
- 14) 12) と同書、p. 3
- 15) 12) と同書、p. 4
- 16) 12) と同書、p. 4
- 17) 12) と同書、pp. 6-7
- 18) Parker, H., ed., *The Progressive Music Series Teacher's Manual Vol. I*, Silver Burdett and Company, 1915,

p.16

19) 18) と同書、p. 15

20) Parker, H., ed., *The Progressive Music Series Teacher's Manual Vol. II - III*, Silver Burdett and Company, 1916, p. 16

21) 同上書、p. 18

22) 18) と同書、p. 12

参考文献

荒巻治美『アメリカ音楽科教育成立史研究』風間書房、2001

Gehrkens, K.W., *An Introduction to School Music Teaching*, C. C. Birchard & Company, 1919

Gehrkens, K.W., "The Evolution of Public School Music in The United States" *Music Supervisors' Journal*, 1924, Vol.10, No.3, pp. 8-13

Keen, J. A., *A History of Music Education in The United States*, University of New England, 1982

水崎誠、大西潤一、吉富功修「幼児・児童の話声位に関する研究」『日本教科教育学会』、第25巻、第4号、pp. 69-78、2003

Parker, H., McConathy, O., Birge, E. B. & Miessner, W. O., *The Progressive Music Series Teacher's Manual Vol. I - III*, Silver Burdett and Company, 1915-1916

Phillips, K.H. *Teaching Kids to Sing*, Schirmer, 1996

Smith, E., *The Modern music Series*, Silver Burdett Company, 1901

Smith, E., *The Eleanor Smith Music Course*, American Book Company, 1908

Smith, E., *The Eleanor Smith Music Primer*, American Book Company, 1911

Tellstrom, A. T., *Music in American Education*, Winston, 1971 (川島正二訳『アメリカ音楽教育史』音楽鑑賞教育振興会、1985)